

最高のプレゼント

(ヨハネ二〇・一九〜二三)

「タエガタキヲエ、」戦後はここから始まった。敗戦の現実市民に虚脱感を与えた。だが同時に少なくとも人々が「ほっとした」「助かった」という実感を得たという。しかし「助かった」「救われた」というだけでは人間は救われない。それにいち早く気づいた一人がかの松下幸之助氏。玉音を聞いたその晩、彼はまんじりともせず「今後はどうしたらよいか」を考えた。そして翌日、「復興再建のため、生活必需品の生産に注力する。これがわれらの使命だ」と言って社員に檄を飛ばしたという。流石経営の「神様(一)」である。

閑話休題。今朝の箇所は復活のイエスと弟子たちの出会いの箇所なのですが、ここで復活のイエスは弟子たちに三つの贈り物を与えている。以下それらを見ていきたい。

一、神の平安

復活の日の夕方、弟子たちはある場所に集まっていたがその戸は閉ざさ

れていた。その理由は「ユダヤ人を恐れ」と書いている。もつともなことである。師はすでに殺されたのだ。だとすれば次は自分たちだろうと彼らが考えても何らの不思議もない。そこへ復活の主は入ってこられ「平安があなたがたにあるように」と言われた。この言葉は当時のユダヤ社会における挨拶の定型文であったようだが、この文脈においてはそれ以上の強い意味を持つていると考えべきだ。そうでなければ二度も「平安があるように」とは言わない。またある学者はこれは平安を与える「宣言」であって、平安を求める「祈り」ではないと主張するが、確かにイエスは平安を与えたと書いていたから(一四・二七)、この見解には相応の根拠がある。イエスは恐れ惑う弟子たちにこの世のそれとは異なる神の平安を与えられたのだ。

二、宣教への派遣

このように復活のイエスはご自身の復活の力をもって弟子たちに平安をお与えになった。恐らく弟子たちにとってはそれだけで十分に素晴らしい、喜ぶべきものであったろう。しかしイエスのプレゼントはそれにとどまらない。イエスは恐れから解放され喜びに満たされた弟子たちに生きる目的と方向を与えられた。それが二一

節にある宣教への派遣である。ここで大切になるのは弟子たちの派遣が先行する父なる神の御子に対する派遣に基礎づけられていることだ。地上におけるイエスの宣教は福音を伝え、捕らわれ、虐げられている人を解放し、癒しを行い、主の恵みの年を告げ知らせることを目的にしていた(参・ルカ四・一八、一九)それと同じ、いやすでに語られたようにそれ以上のことを行うようにと言ってイエスは弟子たちを派遣したのである。イエスは失意の中にあつた弟子たちに平安だけではなく、進むべき道をも示されたのである。

三、救いをもたらす聖霊

このように弟子たちはイエスの平安と人生の目的を与えられた。しかしイエスのプレゼントはまだ続く。二二節にはイエスが弟子たちに聖霊を与えたことが書いてある。息を吹きかけたのは聖霊が命の息吹であることの象徴的表現であろう。要はイエスは決して指令だけにして何の補給もせず放り出すような残忍な司令官などではなかったということである。むしろ自らの上に常に豊かに宿っていた主の御霊、聖霊の力といのちをご自身のミニストリーを延長、拡大するために召し出された弟子たちにも惜しみなくお与えになったのである。そ

してこの聖霊の働きによつてはじめて弟子たちの宣教は神の権威を帯びたものとなり、主イエスがした如くに救いと裁きを切り分けることが可能になる。聖霊は福音宣教に不可欠の要素なのだ。

* * *

厳しい任務を解かれ、平安を得たはずの帰還兵たち。この「救われた者たち」による自殺が社会問題になって久しい。アフガニスタンとイラクからの帰還兵に限つてもその自殺者は数千人、戦闘中の死者の数、六四六〇人を上回るという。ある青年は電話相談員に向かつてこう叫んだという。「こんな人生、生きていく価値がない」生き延びたものが自らを殺める。何という悲しみだろう。こうした痛みや悲しみ、差別と分断を見ると、私たちは人が人を救うことの限界に直面せざるを得ない。確かに救うことは「人には出来ない」。しかし友よ、「神には出来る」。のだ。イエスはその死と復活により、救いを成し遂げたお方であり、あの日弟子たちに与えたもの、即ち言い尽くせない神の平安、人生を生きる究極の目的と使命、そしてそれを実現させるいのちの御霊の力を信じる私達に惜しみなく与えて下さる。さあ神の御子、救い主イエスを、今信じようではないか。